

## 「死を覚悟した沖縄の女子学徒を救った信州の軍医」

三浦博之(みうらひろゆき)

放送記者



1945年多くの民間人が亡くなった沖縄戦。特に「ひめゆり学徒隊」に代表される女子学徒たちの悲劇は多くに知られている。しかも手りゅう弾による集団自決も多かった。「生きて虜囚の辱めを受けず」と教育がされていたからだ。

その中で女子学徒のほとんどを生存させた佐久市出身の小池勇助軍医がいた。

明治23年生まれの小池は金沢医専(金沢大学)から同じ金沢の陸軍医学校に進み医師になった。日中戦争など2回の出征のあと予備役となり佐久市中込駅前眼科医を開業し繁盛した。小学生の頃、小池眼科医院に通った作家の井出孫六さんは「待合室で、子どもどうして騒いでいると勇助先生の雷が落ちた」と言う。

1944年8月小池医師は既に戦局が悪化していた沖縄に3回目の軍医として出征する。1945年3月には那覇近郊の小高い城跡に掘られた壕が野戦病院になった。

そこに積徳高等女学校4年生の「ふじ学徒隊」56人が看護婦として派遣されてきた。少女たちはたった3週間の研修で「一度でも軍の飯を食



小池勇助軍医

ったから軍服は着ていなくても初年兵だ」と教育されていた。ところが小池軍医は少女たちに家庭の事情などの調書を書かせ、31人を帰してしまう。あとの25人は従軍を志願したのだ。

4月1日アメリカ軍の上陸が始まり那覇港から見える城跡一帯は砲撃の的になった。前線からは次々と負傷兵が運び込まれ棚状の病床は溢れかえった。

蒸し暑い壕の中で傷口にはウジが発生し、トイレに行けない患者は空き缶に用をたした。少女たちは切断した足や遺体を運び出し穴に入れるがそこが砲撃され遺体が飛び散る事もあった。

5月米軍が那覇に迫り小池隊も自分で歩けない負傷兵を壕に残して移動する。

移動した先は糸洲の壕という鍾乳洞(ガマ)。川の流れて出来たガマはうねりながら数キロ先の海まで続き、周囲にはひめゆり隊を含むいくつもの病院壕があり住民も多く隠れていた。水が滴るガマの中で近所から持ち込んだ戸板1枚に5・6人が座る状態だったという。時々、米軍の

黄燐弾と言うガス弾の攻撃を受けたが少女たちは服を水に浸して口に当て耐えた。

そんな生活の中で「家族に会う」とガマを出た少女が一人亡くなった。

6月23日日本軍の組織的戦闘は終わり、学徒たちにも解散命令が出た。追い詰められた戦場での解散。ひめゆり隊など多くの学徒は手りゅう弾を渡され付き添いの教官と共に集団自決の道を選んでいった。

だが小池軍医はすぐに解散をしなかった。戦闘の様子を見ていたのだ。

そして6月26日小池軍医は少女たちを集め隊長として訓示した。

「あんたたちは今までご苦労さん」「今まで元気であるから絶対死んではいかんよ」と。

「生き残って、親元へ帰りなさい。必ず2・3名で組を作って、行くんだよ」「そして生き残ったら、お国のために頑張らなくちゃいかん」そのあと「戦争の悲惨さをみんなに話してくれ」と話した。

24人の女学生は2・3人ずつ壕を出て、ほとんどがアメリカ軍に収容された。一組だけ銃撃戦に巻き込まれ1人が亡くなった。そのほか戦後1人が戦争体験の重さに耐えきれず亡くなった。

「絶対に死んではいけない」と訓示した小池軍医は少女たちを送り出したあと、青酸カリを飲んで自害した。そして衛生兵として小池に仕えた兵隊たちは沖縄戦の終結も日本の敗戦も知らずに9月までガマの中からアメリカ軍への抵抗を続けていた。

私は佐久出身でテレビ信州の記者だったが、小池軍医を知らなかった。

リサーチで生き残った22人の少女たちのうち5人は話が聞けそうと分かり、2019年沖縄慰霊の日を中心に沖縄へ向かった。

那覇市での積徳高女慰霊祭に姿を見せたのは名城文子さん<sup>なしろのみこ</sup>だけだった。

可能な限りアポを取っていたが、数日前に入院とか体調不良で会場に来られず、自宅訪問も叶わなかった。

佐久市で小池医師に直接あった人を探した。ただひとり小池医師に診察を受けた体験を語ってもらえた井出孫六さんも戦後75年の去年亡くなられた。

沖縄戦ではないが、ロシア国境の農場に送り込まれてロシア参戦に遭遇し満州を逃避行した「当時16歳の中学生たち」8人に5年前集まってもらい話を聞いたが年明けのメールでその半数が亡くなったと聞いた。

戦争体験を直接聞く機会はどんどん失われて行く。



名城文子さん